

方向

第一五八号 一九九三年七月三〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

化城喩 口品 一法華經巡礼 八五― 1993 07 22 原田憲雄

『法華經』の第七章の題名は、クマールジーヴァの『妙法蓮華經』すなわち妙本では、「化城喩品(けじょうゆほん)」である。「化城(けじょう)」とは「化作(けさ)された都城(とじょう)」ということ、神通力によって浮かびあがった幻の都会である。それが、いつ、たれの、いかなる神通力によって、なぜ、どのように、浮かびあがったか、といったことは、本文を読み進めばわかるので、あらかじめ解説する必要はない。

この章を「化城喩」と呼ぶのは、妙本と、その付属の『添品妙法蓮華經』だけである。ダルマラクシャの『正法華經』すなわち正本、は「往古品(おうこほん)」と訳する。梵本は、*pūva-yoga-parivāto nāma sapṭamaḥ* で、「過去の世からの結びつき」と名づける第七章」というほどの意であり、現存するすべて梵本におおむね共通する。そうして、この章が説く内容は、釈尊と釈尊の説かれる法華經を聞く声聞との間にある過去の世からの結びつきを説明するのだから、その内容と梵本の題名とは相応する。妙本が「化城喩」と題したのは、クマールジーヴァの大胆な意識ということになり、かれは化城の譬喩にこの章の中心を見定めたことになろうか。

ところが刈谷定彦氏は『法華一佛乗の思想』で、この章における化城の譬喩は、「薬草喩品」の三草二木の譬喩とともに、それぞれの章の他の部分とは異質のもので、『法華經』の根本である「一仏乗の思想」を理解しな

い後世の付加である、と推定し論証する。積極的に支持する学力がないのが残念だが、氏の論は正しいだろうと感じる。氏はこの章を梵本によって「過去因縁品（かこいんねんぼん）」と名づける。わたしもそれに従うが、妙本を読みなれた者には、「化城喩品」といわないと通じにくいので、文中では二つを混用することになろう。本文に入ろう。

07-01. むかし、比丘たちよ、過去の世の、計り知れず、広大で、無量、不可思議、推察も測量もできないカルパのときに、いやそれよりもさらに遠い以前に、大通智勝（だいとうちしょう）という如来・尊敬されるべき・正しく覚ったひとが世に出現された。このひとは知と行を完成し、スガタであり、世間を知り、無上のひとであり、訓練されるべき人々の調御者であり、天神と人間との教師であり、仏であり、世尊であった、好成（こうじょう）という世界で、大相（だいそう）というカルパの時に。どれほど遠い過去に、比丘たちよ、この如来は出現されたのであろうか。

bhūta pūrvam dhiksevo tite dhvany asamkhyeyaiḥ kalpair asamkhyeyatarair viplair aprameyair acintyair aparimitair aparamāis tataḥ pareṇa paratarēṇa yad 'āsīt tena kālena tena samayena mahābhijñānābhīdhur (W. mahābhijñānābhīdhur) nāma tathāgato 'rhan samyak-sambuddho loka (W. loka) udapādi vidyā-cararā-sampannaḥ sugato loka-vid annutarāḥ puruṣa-dāmya-sārathīḥ śāstā devānāṃ ca manusyaṅāṃ ca buddho bhagavān sambhāvāyāṃ loka-dhātau mahārūpe kalpe / kiyac-cirotpannaḥ sa dhikṣavas tathāgato 'bhūt /

如来と、その世界、その時の名は、妙本に従った。「大通智勝」は、正本では「大通衆慧」、梵本の直訳すれば「大いなる神通の智慧によって克服した者」となるうか。「好成」は、一本に「好城」とし、正本では「大殖稼」。梵語は「誕生・起源」というほどの意。「大相」を正本は「所在形色」とし、梵語は「大きな形」の意。07-02. たとえば、比丘たちよ、この三千大千世界のあらゆる地種を、たれかが、くだいて微塵にするとしよう。

さてその人が、この世界から、一粒の極めて小さい微塵を取り、東の方向に一千の世界を越えて、その一粒の微塵を落とし、それからその人がまた、第二の微塵を取り、一千の世界を越えて第二の微塵を落とし、このようにして、その人が東の方向に、微塵をすべて落とし、いったとしよう。あなたがたはどう考えるか、比丘たちよ、これらの世界の終りや限界を、計算によって証明しうるだろうか。かれらは答えた。だめです世尊よ、だめですスガタよ。世尊はいわれた。しかし比丘たちよ、数学者か暦算家によってなら、微塵が落とされたり落とされなかったそれらもろもろの世界の限界を証明することができるだろう。ところが、あの世尊の大通智勝如来が完全な涅槃に入られてからのカルパは、その幾千万倍の幾百万倍の幾十万倍というカルパであるから、その限界を計算によって証明することは決してできない。その時間はこのように不可思議で、無量なのだ。けれども、比丘たちよ、あの如来がそれほどはるかな時に完全な涅槃に入られたことを、わたしは如来の知見の力によって、今日か昨日に涅槃されたかのように、想起することができるのだ。

tad-yathā pi nāma chikṣavo yāvān iha tri-sāhasra-mahā-sāhasre loka-dhātāu pṛthivi-dhātus tam

kās-cid eva puruṣaḥ sarvaṃ cūrṇi-kṛtya (W:kurvān) paramāṇu-rajo gṛhītvā pūrvasyāṃ diśi loka-dh-
 ātu-sahasram atikramya tad ekam paramāṇu-raja upanikṣipet / atha sa puruṣo dvitīyaṃ ca paramā-
 nu-rajo gṛhītvā tathā pareṇa paratarāṃ loka-dhātu-sahasram atikramya dvitīyaṃ paramāṇu-raja
 upanikṣipet/anena parvāyeṇa sa puruṣaḥ sarvāvantam pṛthivī-dhātum upanikṣipet pūrvasyāṃ diśi /
 tat kiṃ manyadhve bhikṣavaḥ śakyam teṣāṃ loka-dhātūnam anto vā paryanto vā Gaṇanayā 'dhigantum/
 ta āhuḥ/ no hidaṃ bhagavan no hidaṃ sugata / bhagavān āha / śakyam punar bhikṣavas teṣāṃ loka-
 dhātūnāṃ kena-cid Gaṇakena vā (W:) Gaṇaka-mahā-mātreṇa vā Gaṇanayā paryanto 'dhigantum yesu
 vopanikṣiptāni tāni paramāṇu-rajāṃsi yesu vā nopanikṣiptāni/na tv eva teṣāṃ kalpa-kotī-nayuta-
 śata-sahasraṇāṃ śakyam Gaṇanā-yogeṇa paryanto 'dhigantum/ yāvantaḥ kalpās tasya bhagavato mahā-
 dhijnājnānābhi bhavas tathāgatasya parinirvṛtasyaitāvān sa kalo 'bhūd evam acintya evam apramāṇ-
 aḥ / tam cāhaṃ bhikṣavas tathāgatam tāvac-ciraṃ parinirvṛtam anena tathāgata-jñāna-darśana-bal
 'adhanena yathā 'dya śvo vā parinirvṛtam anusmarāmi//

「三千大千世界」とは全宇宙をさす。われわれの住む世界を小世界といい、小世界が千集まって小千世界、小
 千世界が千集まって中千世界、中千世界が千集まって大千世界。大千世界は、千の三乗の世界だから三千大千世
 界という。「地種」は、大地の要素あるいは成分というほどの意。「微塵」は、目に見える最小のもの。原子と
 いう訳語もあるが、この文章からいって、目に見える程度のものとするほうがよい。いずれも妙本の訳語を踏襲。

彈琴石壁上
 翻翻一仙人
 手持白鸞尾
 夜掃南山雲
 鹿飲寒澗下
 魚歸清海濱
 當時筆武帝
 書報桃花春

山本のぶを刻（一九八一・一二・二七）

李賀 仙人 仙人

琴を弾く 絶壁の上

ひらりひらり ひとりの仙人

手に白鸞の羽根箒もち

夜中に南山の雲のお掃除

鹿は水のむひいやりとした谷川で

魚は帰るきよらかな海の浜へ

さて 漢の武帝の御代じゃとて

手紙を書いて 桃の花さく春ご報告

「仙人」などといって隠遁生活を誇示する道士が、実際はその高尚ぶりを餌に権力者に近付こうとする俗物に過ぎないことを諷刺した作品。これも改訳。

(1993 07 23 原田憲雄)

劉錫

禹

錫

(詞という詩 四)

1993 07 07

原田憲雄

劉禹錫は、字を夢得といい、唐代の中期、七七二年に生れ八四二年に七十一歳で死んだ詩人です。九世紀の初めに、韋執誼・王叔文など革新派の宰相の懐刀として活躍しますが、かれらを憎んでいた憲宗皇帝の即位で、たちまち遠く朗州(湖南省)に追放され、十年後に呼びもとされますが、作った詩が当局を諷刺しているというので、さらに遠い連州(広東省)の刺史を授けられ、その後も僻遠の各地の刺史を歴任し、十年あまりして都に帰り、晩年は太子賓客として洛陽に勤務しながら、白居易と詩文のやりとりをして楽しんだ、ということですが、かれが最初に追放されたところは陶淵明の桃花源記の舞台になった地域で、ふるくから漢族以外の少数民族が雑居していたようです。ここをはじめ大江の上流から下流にかけての各地で暮らすうちに、「竹枝」「女兒」という嘯し言葉のほいる民歌のあることを知り、意味はわからないが曲調にひかれ、新たにその歌詞をつくって土民に唄わせます。これが「竹枝」という詞で、かれのものとされる竹枝は今も十一首のこっています。その一つ。

桃の花

〔唐〕劉禹錫

竹枝詞

まっかなまっかな桃の花 山いっばいに咲いています
蜀江をみなぎりくだる春の水 山ぎしにとどろいて

山桃紅花満上頭
蜀江春水拍山流

花のあかさの褪めやすさ あなたの心にそっくりで

水の流れはかぎりなく わたしの悲しみそのままよ

花紅易衰似郎意

水流無限似儂愁

もっとも、かれの文集である『劉夢得文集』では、「竹枝詞」は他の歌行とともに「楽府」の部に入れられ、「竹枝」「女兒」の嘯し言葉がありません。そのため『詞譜』も『詞律』も、「竹枝詞」の見本としては皇甫松の次の竹枝詞を挙げています。

山の上には

〔唐〕皇甫松

竹枝詞

山のうえには桃の花（サッサ） 谷には杏（ジヨウチャン）

山頭桃花（竹枝） 谷底杏（女兒）

どちらの花もうつとりと（サッサ） 照りはえる（ジヨウチャン）

両花窈窕（竹枝） 遥相映（女兒）

嘯し言葉をのぞくと、禹錫の作の半分の二句で、これを竹枝の常態とみるようですが、じっさいには四句のものも多いようです。

松は、劉禹錫と同時の皇甫湜の子です。時代からいっても詞の内容からいっても、これはさきの劉禹錫の竹枝詞をまねたものと見てよく、禹錫のものもきつと「山桃紅花（竹枝） 満上頭（女兒）」というふうに、各句に嘯し言葉が入っていたのでしょう。嘯し言葉をとれば、外観は七言絶句と似ていますが、平仄は絶句とはあわないのが普通です。禹錫の「竹枝詞」をもう一首。

舟歌

〔唐〕劉禹錫

竹枝詞

しだれ柳があおあおと 江の水は平らになった

楊柳青青江水平

聞こえてくるのは 主^レさんがうたう舟歌

聞郎江上唱歌聲

東のほうから日があがり 西のほうでは雨が降ってる

東邊日出西邊雨

晴れぬというのか はて 晴れるのか

道是無晴還有晴

「江の水が平らになった」というのは、海のほうから潮が満ちてくると、大江の水面が上昇して、陸と水平になる現象を表現しているのだ、港に泊まっている船の出発の時機であり、港の女たちが恋人や客と別れなければならぬときでもあるわけです。そういうおりの女ごころの微妙さが、じつに巧みにうたわれています。

かれが作った詞は竹枝だけではなく、それぞれに相当なものです。次の「憶江南」は、愛唱に堪える作といえるのではないでしょうが。

春がゆく

〔唐〕劉禹錫

憶江南

春がゆく

春去也

「さようなら都のおかた」と言いさして

なよなよと 柳は風に振るたもと

露おいた蘭のくさむら ぬれるハンカチ

ひとりほほえみ また なみだぐみ

多謝洛城人

弱柳従風疑舉袂

叢蘭裏露似露巾

獨笑亦含嚬

『唐詩選』に詩として選ばれる「楊柳枝詞」や「浪淘沙詞」も、詞と見るべきでしよう。

楊柳

〔唐〕劉禹錫

楊柳枝詞

隋の煬帝の旅の仮宮 汴水の岸べに残り

数本の楊柳に 春の思いは堪えかねる

夕ざれの風たてば 散る花はさながら雪

宮の垣根に飛び入るよ 見る人もなく

煬帝行宮汴水濱

數株楊柳不勝春

晚來風起花如雪

飛入宮牆不見人

鸚鵡の洲

〔唐〕劉禹錫

浪淘沙詞

鸚鵡の洲には 浪 砂をまき

二階から眺めると お日さまが傾きかける

泥をくわえた燕らは あらそって巢に帰るのに

気違いみたいなあのは 家のことなど思いもしない

鸚鵡洲頭浪颭沙

青樓春望日將斜

銜泥燕子爭歸舍

獨自狂夫不憶家

百
日
紅

1993 06 18

原
田
慶

家の中にまで霧が降っているような

長い梅雨

ガラス戸の外を見るたびに

その紅色がまぶしくて思わず

目を細めてしまう

わかい幹がゆっくりとまわり

花を盛りあげた枝先は

重さに耐えてかたむいている

苔に散りしいた花びらの

雨にしむ紅色

遠い夏のある日

田中の道を

長いスカートをはきパラソルをさしたひとが

そよ風のように通り過ぎていった

みんな子どもだったけれど

わたし達はならんで見送った

そのひとの微笑みが

わたし達を黙らせたから

その美しいひともお婆さんになって

亡くなったという

鬱々として暮れがちな季節を

百日紅はただ

鮮やかに咲いている

梁の武帝は、五四七年、東魏にそむいて帰属を申し入れてきた侯景を受入れておきながら、五四八年、景が東魏の軍に敗れたのち、東魏から通好を求めてくると、これをも受け入れました。景は怒って、そのような不信を武帝に勧めた側近の姦を誅するという名目で、八月、寿陽で反乱軍を起こし、十月、建康に迫って武帝の宮殿である台城を囲みました。これを手引きしたのが、臨賀王蕭正徳です。正徳は、武帝の甥で、養子とされたことがあり、帝の実子が生まれたので元に戻され、それをつねに恨み、いったん魏に亡命しながら、梁に帰り、咎めも受けずに臨賀王となっていたのでした(なお前号二三頁、五行、蕭綜の説明に「養子：：」と書いたのは思い違いで、蕭綜は武帝の第二子、その出生に疑いをもたれていた人です)。以後、五か月にわたる死闘が続けられます。台城を囲む侯景の軍を、湘東王蕭繹らの援軍が囲むのですが、台城と連絡がとれないうえ、援軍の長である皇族たちがたがいに反目しあって、本気で侯景軍を討とうとしません。城中では皇太子以下、モッコをもって土を運び、土壘を築いて防禦に当たり、鼠や雀はもとより、軍馬を仆し、戦死者の肉をまじえて食うにいたる状態です。五四九年二月、侯景がいつわって和議を申し入れ、皇太子が城中の人を憐れんでこれを受け入れるよう強く献言したため、帝は景を大丞相等に任命します。しかしかれは、そのまま囲みを解かず、三月、ついに台城を陥れます。以後、武帝をはじめ、皇族、側近はすべて軟禁され、帝は病み、五月、「口がにがいから蜜をくれ」と求めますが、それも与えられずに息が絶えた、ということでした。八六歳でした。

梁代五十年が南朝を通じての極盛時代であったこと、そして梁朝が六朝文化の黄金時代であったことは、すでに定評のあるところである。梁書武帝紀には、武帝が人才を尊び、文学を興し、礼楽を修め、版図は南朝の最大を致し、国力は充実の極に達したことを述べて、「魏晉より以降、未だこれあらず」といい、南史の論も「江左より以来、年二百を踰ゆるも、文物の盛なること、ここに美を独りにす」といっている。この盛代の美は偶然によって得られたものではなく、梁の武帝の政治の結果として現われたものであった。

森三樹三郎氏は『梁の武帝』で、右のように帝を讃え、その政治の特色が、

一、寛容仁慈の精神を根本とした。

二、学術文化を尊重した。

三、下層出身の実務家を見出して才能を発揮させた。

三点にあると概括し、

もし梁の武帝が短命に終わっていたとすれば、恐らくあのような太平と文運の隆盛とは、とうてい望み得なかつたであろう。……仁者は寿なりといわれるが、武帝の場合は、命長ければこそ仁政を行ない得たのである。

とっておられます。かれについての批評として余すところなく、仏教徒としての武帝についても十分の紙面をさき、同情にみちた評価をあたえています。他のひとたちにも綿密な研究があり、それぞれに教えられるところが多いのですが、ここではいくらかのことを補足しておきましょう。

かれが、「惑溺」といわれるほどに仏教に傾倒したために、仏教を中心とする學術文化が栄えたことはいうまでもありません。すでに言われているように、かれはただ仏教を信じ、帰依したというだけではなく、みずから經典を研究し、膨大な注釈を著述し、専門の僧侶を前にして講義するほどの学者でした。いっばんに帝王など貴人の著述は、とりまきの学者が作ったものに名だけをかぶせるのが普通です。かれのものも、大部の編纂書はそういうことだったでしょうが、主だった論議はかれ自身の意見を中心としたようです。それらは同時代の高僧たちの著述に劣らず、『大乘起信論』にさきだつような先見性もあるのですから、大したものです。

仏教に限らず、研究は大いにすればよいのですが、かれは皇帝なのですから、研究で得たことを政治の實際に生かし、人類の幸福と世界の調和に役立てることが必要なのです。みずから著述したり、講義したりしていけないということはありますが、皇帝の著述や講義は、それに対する批判がいくく、学問が皇帝の説の方向に傾斜し固定してしまふ弊害が発生しやすいでしょう。著述や講義は、むしろそれぞれの専門のひとにやらせ、皇帝じしんは何もせず、注意ぶかくそれらを眺めていることによって、学問の水準全体を向上させればよいのです。老子のいう「無為」とはそういうことで、道家の学にもくわしかったかれは、そんなことはわかまえていたはずですが、理解が実行につながらず、著述や講義によって自分の好學と博識を世にひけらかし、皇族や貴族たちもまねをして著述や講義に精を出すか、政治や軍事の實際についてはうとく、いざというときには何の役にも立たないという風潮を醸成したのです。

かれの造像・造塔・造寺は評判がわるかったのですが、一面では芸術の向上に役立ち、一面では貨幣の流通を

活発にし、文化・経済の両面に、ある効果があったわけで、乱費とのみ見ることはできないでしょう。しかし、これらの仏像・仏塔・仏寺も、たとえば皇帝の父母の追善の供養として、あるいは敵国北魏の造像・造塔・造寺に対抗し梁皇帝の偉大さを誇示するなどのために建立され、目的も結果もほとんどが皇帝や貴族や官僚の恣意的な企図に独占され、釈尊が教えを説いた因縁にはそぐわず、大衆があまり利用できなかったのは、その欠陥です。

武帝の仏教への入信が、斉の竟陵王の薰陶によったように、かれが仏教徒としてなしたすべての行為は、竟陵王が先例を示していることばかりでした。經典の注釈も、講義も、編纂も、造寺も、造像も、慈善事業も、そして有名な捨身まで、じつは竟陵王がすでに行なっていたことでした。竟陵王は皇帝にはならず、若くて死んだので、後世の耳目をそばだたせるほど有名ではありませんでした。それに対し、巫流といふべき梁の武帝の場合は、皇帝であるうえに「命長ければこそ」、その行為は華美広大で、効果も、影響も、はかりしれない遠くにまで波及したのです。梁朝を開いて以後、友好を求めてきた国に、林邑・千陀利・扶南・龜茲・中天竺・北天竺・狼牙修・高麗・吐谷渾・婆利・滑・師子・百濟・新羅・波斯などがあり、これらは南海、インド、中央アジア、朝鮮の国々で、多くは、武帝の仏教徒としての評判を聞き、好意をもって交際を求めて来たのでしょう。

とはいえ、同じく仏教徒を君主とする魏とのあいだの敵対関係は、魏が東西に分裂した後の東魏からの申し入れでやっと解消したので、その通好も東魏のほうが熱心でした。西魏と敵対する東魏が、梁と同盟関係を結んで憂いを少なくしておきたいというのは、君主の信仰とは関係のない勢力バランスの問題かもしれませんが、『般若経』の注解を著し、『涅槃経』を尊んだ武帝であれば、梁から魏にむけ、進んで和平工作をしてもよかったです。

しょうに、梁はこの問題についてはあまり積極的ではなく、そればかりか、河南の地をみやげに帰属を申し入れた侯景を、東魏を裏切つて受入れ、その侯景が東魏にやつつけられると、見放して東魏と結ぶ。「皇帝菩薩」を自負した武帝にふさわしい行動とはいえますまい。武帝は仁慈の人といわれます。仁慈は仏教の慈悲に通じますが、かれの仁慈は、身近かの者にはかぎりなくやさしいが、遠くの者には冷淡でした。皇族や貴族は背いても許したのに、庶民に対する法律の適用が厳しかったことは有名です。慈悲を名目に、戒律に規定する以上の肉食禁止をみずから実行し、国家の祭典の犠牲さえ廃止したのは勇断ですが、軍人や人民の生命を憐れんで戦争をやめる工作を進めなかったのは、理解しにくいことです。肉眼の届かぬ処で行なわれる大量の殺戮には無神経だったので、仏教天子といつても、インドのアッシュカ王とは大いに隔たるところでしょう。

武帝が、インドからやってきたダルマ大師に、「朕は寺を造り、人を度し、像を造り、經を写す。何の功德ありや」とたずね、「無功德」とつっぱねられた話は、はなはだ有名です。これは武帝もダルマも死んで二〇〇年も後の唐代になってから作られた話で、事実でないことは、今では明らかになっています。けれども、「梁の武帝」といえばまず人がこの話を思い浮かべたのは、武帝の仏教信仰が形式的であったことに対する批評として、びったりだったためではないでしょうか。かれの生涯の行動を支配した原理は、じつは中国の習俗であり、「三宝の奴」たることを宣言した後にも、いざというときにかれを決断させるのは、釈尊の教えではなく、欲望に先導された占いであったり、夢見であったりしたことを、この作り話ほど巧みに言い当てているものはありません。

※編集後記 本号は、つごうで一六頁にしました。読者のみなさまのご健康を念じあげます。